

評価からみる “社会包摂×文化芸術” ハンドブック

文化庁×九州大学共同研究チーム **編**

評価からみる“社会包摂×文化芸術”ハンドブック

一人ひとりの課題にせまり
社会に新しい価値観をつくる

文化庁×九州大学共同研究チーム編

社会包摂
SOCIAL INCLUSION

文化芸術
CULTURE AND THE ARTS



九州大学



大学院芸術工学研究院
大学院芸術工学府
芸術工学部



SOCIAL INCLUSION × CULTURE AND THE ARTS

評価からみる

“社会包摂×文化芸術”

ハンドブック

文化庁×九州大学共同研究チーム

編





評価というと、面接評価、人事評価など、評価される側の気持ちや意図とは関係なく、立場の上の人が一方的に判定をくだすというイメージがあるかもしれませんが。しかし、公的な補助金や助成金、委託事業などを評価するのは、特定の個人ではなく、公を構成する多様な市民です。本ハンドブックでは、民主主義の社会で公的事業を評価するのは多様な市民自身であることに立ち返って、社会包摂を意識した文化事業の評価について考えることにしました。

そもそも評価を意味する英語の“evaluation”は「価値を引き出す」という意味で、価値を発見することに重きが置かれています。評価は、事後的に良し悪しを決めるものではなく、より良い未来を築くために実施されるべきです。大切なのは、目的を明確にし、その目的に合った基準を用いて、適切な方法で評価を実施することです。

このように言うと、「なんだか難しそう」と思われる方がいるかもしれません。でも、そんなことはありません。このハンドブックを読むと、きっと「これなら私たちもできそう」と思っただけははずです。

本ハンドブックは、『はじめての“社会包摂×文化芸術”ハンドブック』の続編として作成されました。主な読者対象は、前編と同様、文化行政に携わっている人、公共政策に関わりながら芸術活動を行なっている人、共生社会の実現に広く関心のある人です。事業実施現場での評価のあり方、事業実施者と資金提供者との間のコミュニケーションに焦点をあてています。必要に応じて、二冊を組み合わせて活用いただければ幸いです。

文化庁 × 九州大学 共同研究チーム 研究代表者
九州大学大学院芸術工学研究院 准教授
中村 美亜

	はじめに	2
	各章のダイジェスト	4
01	社会包摂を意識した文化事業の評価とは	13
02	評価をはじめる前に	29
03	現場から学ぶ評価の知恵	39
04	評価をととしたコミュニケーション	55
	インタビュー調査 協力者	69
	参考文献	70
	おわりに	72
	研究メンバー	73

01

社会包摂を意識した文化事業の評価とは

第1章では、文化事業の評価と、社会包摂を意識した文化事業について理解を深めることから、両者を結びつける評価の方法を考えていきます。

評価で大切なこと

- 目的にあわせて方法を選択する
- 複数の視点から「あた価」を「ひよう評」する
- 「目的」と「目標」の違いを意識する

社会包摂を意識した文化事業

- 社会包摂とは、違いのある人たちを、違いを尊重したまま受け入れる社会を目指そうという考え方
- 課題解決と価値創造の両立が重要

評価へのアプローチ

- プロセス評価
 - ・ 事業の成果に至るロジックと運営の両面から検証
 - ・ エンパワメントとセレンディピティを生み出す条件に着目
- アウトカム評価
 - ・ 「アウトプット」評価との違いに留意
 - ・ 参加型評価を通じて言語化
 - ・ 時期や波及範囲、必要性や可能性を考慮して整理
- 事業報告
 - ・ 客観性を高めるための書き方を意識
 - ・ 事業の実施前と実施後の変化がわかるように
 - ・ 目的達成のための変更は、理由や意義を記載
- アドボカシー
 - ・ 成果の効果的な発信
 - ・ 戦略的なコミュニケーション

まとめ

- 評価は目的ではなく手段
- 評価はコミュニケーションの場
- 評価は本質的に創造的な行為

02

評価をはじめる前に

第2章では、文化事業を実施する団体が「評価」の問題に直面した時に、どのようなところに困難が訪れ、どういったことに気をつけていくとよいか、手がかりとなりそうな知見をもとに検討します。

1 誰が評価するのか？

- 社会包摂につながる芸術活動の評価は、誰かがしてくれるものではなく、みんなでつくるもの
- どのような評価を行なっていくかを合議し、参加型の評価を行っていく

2 何を評価するのか？

- 今から行おうとする評価が、誰にとって、何をもたらすためのものなのか、を十分に検討する
- 参加者の属性が多様なほど、目標達成のための「^{ヒト}標」が多様であることを意識したファシリテーションが重要

3 どのように評価するのか？

- 「プロセス評価」と「アウトカム評価」の違いを意識し、現場のできることに応じてデータの収集手法を検討する
- 科学や数値の枠におさめられない、質的調査についても専門家のあいだでさまざまな試行がされている

4 いつ評価するのか？

- 評価をサイクルととらえ、目的設定からデータ収集、振り返りまでをひとつのデザインとして構築することが重要
- 社会包摂につながる芸術活動の醍醐味は、評価設計の時点で想像できない予想外のことが起こること

まとめ

- 自分たちの現場や目的に応じて、評価方法を柔軟にカスタマイズすること
- 自分たちの活動の何が大切で、何に価値をおいているのか、活動する人たちの中で共通認識を持つこと
- 共通認識がどのようにしたら他の人たちに伝わるのか、関わる一人ひとりが合議し、新たな言語を獲得すること

お互いに、ともに評価するための
「場」を形成していく

03

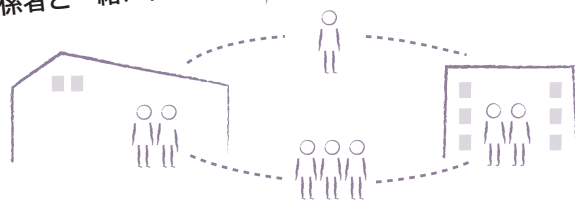
現場から学ぶ評価の知恵

1 事業関係者の意識の変化

P42

事業実施団体 一般社団法人琉球フィルハーモニックオーケストラ

評価指標やアンケートを、
多種多様な関係者と一緒に作りたい



2 協働相手との関係づくり

P44

事業実施団体 一般財団法人たんぽぽの家、近畿労働金庫

企業と協働してつくるアートプロジェクト。
ゴールや価値観の共有はどうやったらうまくいく？



3 団体内部の人材育成

P46

事業実施団体 NPO法人BEPPU PROJECT(混浴温泉世界実行委員会事務局)

評価を団体の組織基盤強化や人材育成に活かしたい



第3章では、評価の専門家や事業実施団体に対して、実際の現場でどのような評価に取り組んでいるのかについてインタビューを行いました。自分たちの目的や課題意識に近い事例から、評価を活かすヒントを探ってみましょう。

4 評価の活用とアドボカシー

P48

事業実施団体 北九州芸術劇場(公益財団法人北九州市芸術文化振興財団)

施設運営に関わる事業評価において、
長年蓄積されたデータをもっと活用したい



5 心理学との連携による指標づくり

P50

事業実施団体 東京文化会館(公益財団法人東京都歴史文化財団)

即興音楽のワークショップで、
高齢者の目に見えづらい変化を測りたい

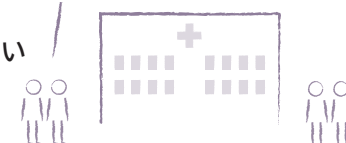


6 医学との連携による指標づくり

P52

事業実施団体 仙台富沢病院

演劇の手法を用いた
療法の効果を測りたい



04

評価をととしたコミュニケーション

行政

文化事業の評価って、
どうしたらいいのかな。

現場での自己評価では
数値で測れる指標を
使ってほしいな。

評価設計

評価方法について考える前
に、評価をする目的を考え
ることが大切です。事業計
画のなかで評価の目的も
考えましょう。

指標検討

アウトプットだけでなく、
アウトカムも数値で測る
ことは可能です。事業の成
果をとらえられる指標は
何かを検討しましょう。

現場

評価って、事業が
終わった後にする
ことじゃないの。

指標って、
そもそも何？

第4章では、異なる立場で事業に関わる人たちがコミュニケーションを行うハブ(結節点)として、評価をとらえ直します。評価の各場面において、事業の運営・改善・発展にいきる、評価をととしたコミュニケーションのポイントをみていきます。

アンケートで取れること
には限界があるなあ。

上司への説明も報告書を
基にしっかりできたぞ。

データ収集

一つの方法だけでなく、
多様な方法でデータを
集めてみましょう。日頃
から事業の記録をアーカ
イブすることも大事です。

結果の活用

評価の結果をどう使うの
か、戦略を描くことが大切
です。最後に事業の成果を
伝えたいのは誰ですか？

とにかく本番では、
アンケート取った
方がいいよね？

わたしたちの活動の
よさって、なかなか伝
えることが難しいな。

12～71ページは非公開になっています。ハンドブックに掲載されていた内容を改良し、書籍『文化事業の評価ハンドブック 新たな価値を社会にひらく(SAL BOOKS 3)』に掲載しています。

書籍の情報はこちらです。

<http://www.sal.design.kyushu-u.ac.jp/publication/salbooks3/>



アメリカの歴史学者、ジェリー・Z・ミューラーは、評価の弊害について次のように記しています。

世の中には、測定できるものがある。測定するに値するものもある。だが測定できるものが必ずしも測定に値するものだとは限らない。測定のコストは、そのメリットよりも大きくなるかもしれない。測定されるものは、実際に知りたいこととはなんの関係もないかもしれない。本当に注力すべきことから労力を奪ってしまうかもしれない。そして測定は、ゆがんだ知識を提供するかもしれない—確実に見えるが、実際には不正な知識を。(『測りすぎ』みすず書房、2019年、4頁)

しかし、ミューラーは評価を全否定するのではなく、「問題は測定ではなく、過剰な測定や不適切な測定だ。測定基準ではなく、測定基準への執着なのだ。」と記します(同5頁)。では、どうすれば文化事業を萎縮させるのではなく、より創造的な活動へと導く評価が可能なのでしょう。どうすれば評価は文化事業の社会的意義を可視化する手立てとなるのでしょうか。

私たちはこれらの問いに答えを見出そうと、海外の動向調査、インタビュー調査、公開研究会などを実施し、議論を重ねてきました。評価方法については、すでにTokyo Art Research Lab、社会的インパクト・マネジメント・イニシアチブ、NPO法人アートNPOリンクなどからガイドが刊行されているため、今回は評価の「方法」ではなく、評価に対する考え方や評価デザインといった「方法論」に焦点をあてました。昨年度刊行の『はじめての“社会包摂×文化芸術”ハンドブック』とともにご活用いただければ有り難く思います。なお、『はじめての～』は、まもなく英語版も刊行されます。

最後になりましたが、本ハンドブック作成にあたっては、前回同様、インタビュー調査や公開研究会などで多くの方々からたくさんの有益な情報や示唆をいただきました。この場を借りて厚くお礼を申し上げます。

文化庁×九州大学 共同研究チーム 研究代表者
九州大学大学院芸術工学研究院 准教授
中村 美亜

文化庁×九州大学共同研究チームのメンバー

文化庁

朝倉由希	文化庁 地域文化創生本部 総括・政策研究グループ 研究官
青柴勝	文化庁 地域文化創生本部 総括・政策研究グループ 調査役
奥田晃美	文化庁 地域文化創生本部 総括・政策研究グループ チーフ
永井麗子	文化庁 地域文化創生本部 総括・政策研究グループ スタッフ

九州大学ソーシャルアートラボ

中村美亜	九州大学大学院芸術工学研究院 准教授 [研究代表者、第1章執筆担当]
長津結一郎	九州大学大学院芸術工学研究院 助教 [第2章執筆担当]
村谷つかさ	九州大学大学院芸術工学研究院 学術研究員 [第4章執筆担当]
藤原旅人	九州大学大学院芸術工学研究院 テクニカルスタッフ

アドバイザー

大澤寅雄	(株)ニッセイ基礎研究所 芸術文化プロジェクト室 主任研究員
宮田智史	NPO法人ドネルモ 事務局長 [第3章執筆・編集担当]

事務局

櫻井香那	NPO法人ドネルモ スタッフ [第3章執筆・編集担当]
------	-----------------------------



評価からみる“社会包摂×文化芸術”ハンドブック

一人ひとりの課題にせまり 社会に新しい価値観をつくる

発行日	2020年3月25日
編	文化庁×九州大学 共同研究チーム（研究代表者 中村美亜）
執筆	中村美亜、長津結一郎、村谷つかさ、NPO法人ドネルモ
編集	NPO法人ドネルモ
デザイン	長末香織
共催	公益財団法人福岡市文化芸術振興財団
後援	日本アートマネジメント学会九州部会
助成	2019年度 文化庁 大学における文化芸術推進事業
発行	九州大学大学院芸術工学研究院附属ソーシャルアートラボ 〒815-8540 福岡市南区塩原4-9-1 http://www.sal.design.kyushu-u.ac.jp/

・本ハンドブックは、文化庁と大学・研究機関等との共同研究事業「文化芸術による社会包摂の在り方」の研究成果に基づいています。

・本ハンドブックの PDF版は、以下のURLよりダウンロードできます。
<http://www.sal.design.kyushu-u.ac.jp/publications.html>

・視覚障害、識字障害、上肢障害などの理由で本ハンドブックのテキストのデータなどの提供をご希望の方は、sal-cul@design.kyushu-u.ac.jpまでご相談ください。全てのご要望にはお応えできない場合もございますが、可能な範囲で対応いたします。

・本ハンドブックは、非営利目的に限り、出典を明記することを条件に利用（転載、コピー、共有等）を許可します。

©2020 文化庁×九州大学 共同研究チーム